

誇り高き若い国ベトナム:出張講義を終えて

著者名 櫻井 和朗

北九州市立大学 国際環境工学部、教授
高分子学会国際交流委員長

機内放送で目を覚ますと、羽田を深夜に発った搭乗機はタンソンニャット空港に向かって高度を徐々に下げつつあった。雲を抜けると、眼下には、濃厚な緑に覆われた大地と、その間をうねる様に流れている土色の水をたたえたメコン川が広がっていた。タンソンニャット空港の名から、サイゴン陥落の時、この空港から沖合のアメリカ海軍の空母までヘリコプターで脱出していく米大使館やサイゴン政府の人々の映像を連想するのは、我々の世代までであろうか。次から次に飛来するヘリの着艦のために、人を運び終わった航空機を次々に海中投機する映像は衝撃的であった。当時の日本は平和を謳歌し、経済成長と近代工業化への道をひらすら走っていた。

ベトナム戦争終結と南北統一から45年、今のベトナムは急速な経済成長を遂げつつある。ちょうど45年前の日本のような。そんな伸び盛りの国で、高分子学会主催の2回目のベトナムでの出張講義を行うために、我々はメコンデルタの中心都市である、Can Tho市に向かった。

アジアの国での高分子科学の出張講義は、明石前会長の時から始まった。これから化学産業が発達するであろう国で、高分子科学の普及と、我が国と日本高分子学会のプレゼンスを高めることを目的としている。相手国に出向いて、高分子化学から物理化学の入門コースをその分野の専門の先生方に英語で講義をしてもらおう。今回は、高原会長には高分子化学の歴史と高分子学会の紹介、それに構造物性を、京都工織の中先生には高分子合成を、北九大の櫻井が分子量の決定方法などの特性評価を、長岡科技大の河原先生には粘弾性とゴムに関して、講義をお願いした。

空港からは車で移動。ホーチミンの町を抜けると、回りは農業地帯となる。日本とは比べ物にならないくらい、緑が濃い。ときおり渡る川の水は土色である。『サイゴンから来た妻と娘』の中で近藤紘一は、ベトナムの川には魚がわき、地面には自然に果物が生え、田には稲が4度稔ると述べているが、豊かな大地である。土色の川で泳ぐ気分にはなれないが、養分をたっぷり含んでいる証拠である。出張でも欠かさない散歩の途中で、朝食のパンの切れ端

を川に投げ込むと、養殖池にいた餌のように小魚が集まり、やがて人の頭ほどある大きな魚がヌッと現れて、パンを小魚ごと飲み込んでしまった。こんな川で泳いだら、足の指いくつあっても足りない。



写真1 : 町はメコン川にそって発展している。

川幅が数キロはあると思われるメコン川を2回越えると、そこは Can Tho市である。空港から車で3~4時間の距離である。出迎えて頂いたのは、現地でのお世話をして頂いた Dan-Thuy Van-Pham先生であった。彼女は京都工織の宮田貴章(Tran-CongQui)先生の研究室に留学して学位を取られてから、ベトナムに戻って教職につかれている。ベトナムの方の略称は難しい、Dan や Van があまりに多いので、名前の途中の“Thuy”を使って皆さんはチィイ先生と呼んでいる。今回は、チィイ先生と同僚と先生の研究室の学生さんに大変お世話になった。あらためて感謝をしたい。



写真2 : 会場の前で出迎えてくれたスタッフ

翌日は8時半から受付開始とのことで、ホテルから歩いて向かう。強烈な日差しで、ぐんぐんと気温が

昇っているのがわかる。サングラスと帽子が必需品である。会場につくと驚いた。高分子学会と Can Tho のロゴが入った大きなたて看板が設置してあり、その前でアオザイを着た美しいスタッフが出迎えてくれた。チィ先生の学生さんらしい。



写真 3 開会の挨拶をする Thuy 先生と高原会長

ベトナムの大学では今は丁度中間試験の最中と言う事で、どれだけの人に来て頂けるか心配していたが、会場には 100 人を超える方に来て頂いた。現地の実行委員会が宣伝をしてくれた。Can Tho 大学の学生以外に、メコンデルタ地区の他の小さな大学や専門学校、さらにはホーチミン大学の教員までも学生を連れて参加して下さった。

講義は Thuy 先生の開会の挨拶から始まった。素晴らしく流暢な英語である。こんなことを書くと、著者にその資格があるかとお叱りをうけそうだが、日本の研究者の英語のプレゼン力は、中国や韓国などの研究のライバル国と比べるとやはり劣っている。それに、これから科学技術が発展する国の研究者と比べても、決して高いとは言えない。海外の学会に来るたびに、このままではいくら良い研究をしても、英語での表現力が弱ければ、日本の国際的なプレゼンスは落ちていくばかりとの思いを強くする。特に、若い世代での、日本と他の国の差が開きつつあるのが心配である。ガラパゴス化するのは、携帯電話だけで十分である。「日本が好きです、だから日本でずっと働きます、英語は要りません」と大学生が甘えている時代ではない。

出前講義では、話す内容を充分吟味をして、できるだけ内容を絞り、基礎的な話をするべきである。それは十分に分かっていたつもりだが、やはり今回の内容は半分くらいの学生には難しかったようだ。数式はできるだけ控え、概念だけを絵で説明するようにしないとイケない。一日で高分子科学の基礎をすべて話すのはもともと無理があるのだから、エッセンスだけを伝えるべきであった。これは今後の反省材料である。できれば、英語の薄い高分子科学の

教科書を、学会として配布できるようなことをして、それに基づいて話ができるようになってほしいと感じた。出前講義を今後とも続けるならぜひ考えたい。



写真 4 集合写真

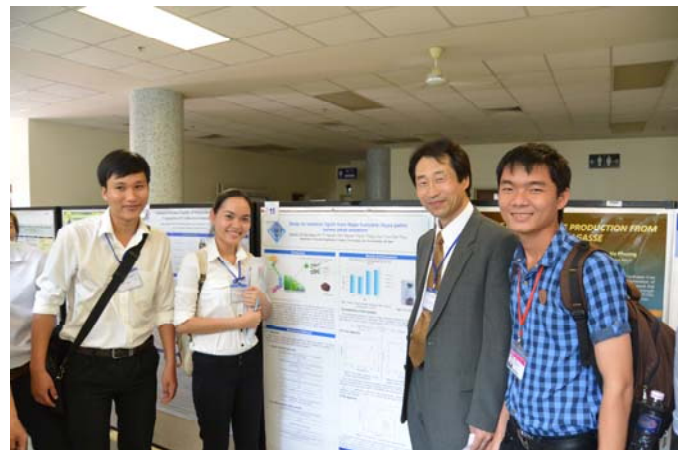


写真 5 河原先生とポスター発表の学生

16 件のポスター発表があり、2 件を優秀賞として選んだ。ポスターの内容は、コンポジットや天然高分子を使った内容が多かった。夕方は、会場の前に、簡単なテーブルを用意して、学生や若いスタッフも参加した手作りの懇親会を行った。日本への留学熱は高く、どうやったら日本にいけるか、奨学金の制度についての質問が多かった。

ベトナムの学生の印象は、極めて好日的、上昇志向が高い、優しい、無垢で素直である。また、自分の国を愛している。ベトナムの歴史を振り返ると、中国、フランス、日本、アメリカと常に自分たちより大きな国から自国を守る戦いの連続である。長い辛い時代を生き抜いたのは、ベトナム人としての identity であり誇りであり、祖国や民族を愛する気持ちだと思う。スリムなデニムを格好よく着こなして、優しげに微笑む、小柄なベトナムの若者だが、芯には強い誇りと自負を持っている。これからも、大切にしていかななくてはならない隣人であり、友人である。